

ヨハネ4章1～15節「永遠のいのちへの水」

いろいろなことで心が渴いていると感じことがあるかもしれません。皆さん的心はどうでしょうか。渴いているとしたら、何によってその渴きを癒そうとするでしょうか。

1. 主からの働きかけ（：1～10）

イエスと弟子たちはユダヤからガリラヤに移動する際、「サマリアを通って行かなければならなかつた」のです。ユダヤ人は普通、サマリアを通らない迂回ルートを通りました。それは、「ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかつた」からです。

「なければならぬ」と訳されていることばは、ヨハネの福音書の中で使われている箇所を見ると、いつも神のみこころに従つて何かをし「なければならぬ」と言われています。ですからこの時、イエスがサマリアを通つたのは神の主権と御心に従つたということでしょう。

その旅の途中で、イエスはスカルの町の近くのヤコブの井戸の傍で、座つて休んでいました。弟子たちは食べ物を買いに町へ出かけていて、イエスが一人でいました。そこに一人のサマリアの女の人が水を汲みにやって来ました。

「時はおよそ第六の時」で正午ごろのことです。どうしてこの女の人は真昼間に水を汲みに来たのでしょうか。町の人たちが生活に必要な水を汲みに出て来るのは、おそらく朝早くか夕方に違いありません。この女の人は人目を避けてやって来ました。その理由は後で明らかになります。

井戸には誰もいないだらうと思って来てみると、一人の男の人が座つています。しかもユダヤ人です。するとそのユダヤ人が「わたしに水を飲ませてください」と言います。そこで彼女は驚いて問い合わせます。9節。

「付き合いをしなかつた」と訳されている元のことばは「一緒に使う」という意味があります。この時イエスは、ご自分では水を汲む物を持っていませんでしたから、この女の人の器と一緒に使うことを何とも思っていません。このことをきっかけに、イエスは彼女に寄り添おうとしているのです。それは、主イエスが彼女のことをご存知だからです。神である主イエスは彼女の状況も必要もご存知なのです。そして、彼女の本当の求めに応えようとされるのです。

10節。主イエスはこの女の人の問題をご存知ですが、イエスは彼女を裁いたり、上から説教したりするのではなく、寄り添ってくださいます。水を飲ませてくださいと頼みながら、実は、彼女の心の渴きを癒す「生ける水」を与えようとするのです。

神、主は私たちにも働きかけてくださいます。主イエスのほうから語りかけ、私たちに寄り添ってくださいます。私たちの心の渴きをご存知で、私たちをあわれみ、生ける水を与えようと働きかけてくださるのです。

2. 生活に表れている心の渴き（：11～18）

「生ける水を与える」と言われて女の人は問い合わせます。11～12節。サマリア人は自分たちがアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であると自覚しています。そして、ヤコブの井戸は、先祖ヤコブの時代から千年以上もずっと枯れることなく水を与え続け、今も自分たちを生かしているとサマリア人は感謝しています。女の人もこの井戸こそ「生ける水」を与えてくれると思っていますが、目の前のユダヤ人が、自分に求めるなら「生ける水」を与えると言います。汲む物を持っていないのに、一体どこから手に入れるのか、ヤコブの井戸とは別に水が湧き出る所があるのかと、彼女は不審に思いつつも、興味を持つのです。

13～14節。どんな水なのか、具体的にはよく分からぬけれども、期待を寄せたくなります。権威ある力強いことばであり、素晴らしい約束です。

15節。ここに、彼女が井戸まで水を汲みに来ることを辛いと思っていた気持ちがよく表れています。人目を避けて水を汲みに来る自分の状態から逃れたいと思っていたのでしょうか。解決を得たいと思っていたことが分かります。そして、彼女は「その水を私に下さい」と主イエスに求めました。十分な理解を得た上で求めではありませんでしたが、ともかくも主イエスに求めたことは幸いでした。

16節。なぜここで夫が必要なのでしょうか。イエス様がこのことをおっしゃったのは、この女の人に自分がどういう状況にあるかということを改めて自覚させるためでした。17～18節。彼女はこれまで5回も結婚しました。死別によるのか離婚によるのかは分かりません。そして、今は6人目の男の人と暮らしていて、もう正

式に結婚することもしなくなっているのです。同棲は律法によれば姦淫と見なされるので、人目を避けて水を汲みに来ているのです。この女の人の生活の辛い面、あるいは醜い面を主イエスはわざわざ引きずり出されました。なぜでしょうか。そこに、この人を苦しめている「渴き」があるのを主イエスは見ておられたのです。そして、この人に自分の心の渴きを改めて見つめさせたのです。

このような「渴き」はこの人だけのものではないでしょう。私たち誰もが知る「渴き」です。その「渴き」を何によっていやそうとするのかが問題です。多くの人が、何によって本当に自分の心が満たされるのか、渴きがいやされるのか、求め続けているのではないでしょうか。けれども、一時的に渴きを癒されたとしても、またすぐに渴いてしまいます。「この水を飲む人はみな、また渴きます」と言われているとおりです。そして、次々に別のものを求めていくのではないでしょうか。

私たち一人一人の心にもそのような渴きがあるのではないかでしょうか。そして、しばしば私たちの生活に表れているのではないかでしょうか。振り返ってみて、生活の中で同じような問題が繰り返されていることはないでしょうか。その背後に、自分の心が満たされていない何かがあるのかもしれません。神はそれらも含めて私たちのすべてをご存じでいてくださいますから、自分の状態を見直し、神の前に正直に申し上げることが大事です。そうするならば、イエス・キリストが与えてくださる水を飲んで、自分自身が変わるように導かれるのです。

3. まことの礼拝者となる（：19～30）

イエスが自分の境遇を知っているので、サマリアの女の人は驚いて、「あなたは預言者だとお見受けします」と言います。ここに彼女の変化のしるしを見ることができます。そして彼女は、心の隅にあつたけれども忘れていた疑問、神を礼拝することについての疑問を話し出しました。20節。

この疑問に対して主イエスははつきりと言われました。礼拝するのはエルサレムにおいてか、この山においてかと争っているが、そういうことが問題にならない時が来ると言います。

21～24節。エルサレムの神殿の礼拝は完全なものではなく、キリストの完全な犠牲によって獻げられるまことの礼拝の影にすぎませんでした。まことの礼拝とは、「御靈と真理によって父を礼拝する」ことです。すなわち、聖靈なる神によって与えられた信仰によって、また神が啓示された真理に基づいてこそ、父なる神を礼拝することができるということです。そして、その時が今来ていると主イエスは言われます。

どうしてそう言えるのでしょうか。その答えは、この女の人に示されていました。25節。こう言いながら彼女は、自分が本当に必要としているのは、キリストによって与えられる救いであることに気づいたことでしょう。自分の渴きを癒してくださるのはキリストなのでしょうと言います。

それに対してイエスはお答えになりました。26節。イエスこそ、神を「父」と呼ぶ神の御子である方、旧約聖書に預言されていたやがて来られる救い主、キリストです。神の御子、救い主であるイエスが世に来られて、父なる神を礼拝する豊かな素晴らしい生き方をすることができる時がすでに始まりました。父なる神を「御靈と真理によって」礼拝するまことの礼拝者は、心の渴きを癒されます。永遠の神を礼拝し、永遠の神とつながって生きることが、永遠のいのちへの水が湧き出る本当に満たされた生き方なのです。

キリストの前にいるというこの出来事が彼女を変えました。これは彼女の回心の経験と見ることができるでしょう。その後の記述を読むと、人に会いたくないと思っていた彼女が、人々の中に入つて行き、自分が出会った方のことを紹介したのです。イエス・キリストと出会った彼女は全く変えられました。そして、彼女の証言によって多くのサマリア人がイエスを信じました。このサマリアの女人との出会いのため、彼女の救いのため、多くのサマリア人の救いのために、イエスはサマリアを通つて行かなければならなかつたのです。

イエス・キリストを信じる者に神が与えてくださるのは、ひとときの満足や幸福感、あるいは人生の問題解決にとどまりません。人に永遠のいのちを与えくださるのです。その人自身が新しく変えられるのです。神にまことの礼拝を獻げ、神のみことばを聞き、神の愛を受け取り、それに応答して生きる人生となります。みことばを思い起こし、神を賛美し、神に感謝し、神を信頼して歩みます。それは神とともにある永遠につながる歩みなのです。そのような永遠のいのちへの水を与えるために、神の御子イエスはこの世に来なければならなかつたのです。そして、問題を抱えて渴いているあなたに寄り添つてくださり、ご自身を現し、救いを与えてくださるのです。神の御子であり、救い主であるイエスの約束のみことばを信じて、受け取りましょう。